

福音書記者マタイの執筆動機およびその自己理解について

澤村 雅史

広島大学大学院総合科学研究科

The Gospel According to Matthew : Motivations and Identity of the Author

Masashi SAWAMURA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

論文の要旨

新約聖書は、旧約聖書とともに、キリスト教という宗教にとって「正典」すなわち信仰のあり方を規定する規範的な書物であるとされる。新約聖書の冒頭に位置する「マタイによる福音書」もまた、他の新約諸文書と「視点」の違いこそあれど、同じ「真理」を指し示す文書として、それらとの調和や一貫性を前提に、(主にキリスト教の中では)読まれてきた。

一方、近代以降発達した聖書学という学問分野は、正典内の諸文書の一貫性という前提を崩し、文書相互の比較を通して、各文書がもつ思想とその背景を明らかにすることを目指してきたのであるが、それでもなお、近年に至るまで、マタイ福音書がその基本的性格において「キリスト教文書」であることについては、ほぼ前提とされてきたといえてよい。

しかし、福音書記者マタイの自己理解が未だユダヤ教の内部にあったのか、あるいはすでにキリスト教という一宗教運動を担うことに置かれていたのか、という点については改めて問われるべきことがらとして残っているはずである。

近年、新約聖書学の領域では、こういった問題意識にたってマタイ福音書の基本的性格を問

う研究が進みつつある。その上でなお、マタイ福音書はその記者や属する共同体がユダヤ教と袂を分かった後に書かれた、あるいはまさにそのことを契機として書かれたとする研究者が多数を占める一方で、福音書記者マタイはいまだにユダヤ教の枠内にあるという説を唱える研究者も徐々に増えてきている。この立場は、壁の内側を意味する *intra muros* 説と呼ばれており、本研究もその系譜に連なっている。

福音書記者マタイがユダヤ教から分離して、すでにキリスト教という新しい宗教に身をおいていることは、とりわけ、マタイ 28:18-20 における「天においても地においてもすべての権威が私に与えられた。それゆえ(あなたがたは)行ってすべての民を弟子とせよ、彼らに父と子と聖霊の名において沈めをなし、私があなたがたに命じたところのすべてを守るように教えよ。見よ、世の終わりに至るすべての日々に、私はあなたがたとともにいる」(私訳)というイエスのことば、いわゆる「大宣教命令」を頂点とする、「救済史」的モデルをマタイ福音書中に読み取ることによって根拠づけられてきた。福音書の末尾に、復活したイエス・キリストの、弟子たちに向ける言葉として記されたこの指示は、「偏狭な民族主義的ユダヤ教」の枠組みを乗り越え、世界じゅうの諸民族へ分け隔

てなく福音を宣教することを宣言しているというのである。

しかし、マタイ福音書にこのような、救済史的転換を読み取ろうとすることは、新約聖書正典内の諸文書の内容的整合性を前提に、正典内の他の文書の思想的枠組みをマタイ福音書にあてはめていることに過ぎないのではないか、というのが本研究がたつ問題意識である。

新約諸文書の中で、救済史的史観を明確に打ち出しているのは、使徒パウロによる書簡である。なかでもローマの信徒への手紙がその典型である。そこにはおおよそ以下のような主張が述べられている。神に対する背きという罪を犯した人間が神に立ち返るための道として、選民イスラエルに律法が与えられたが、それによってはむしろ人間の罪が顕わになるばかりであった。そこで、イエス・キリストによって「信による義」が啓示されたが、イスラエルはそれを拒絶し、むしろそれを受け入れたのは異邦人であった。しかしイスラエルも神によって退けられたのではなく、「信による義」によって異邦人とともに、神に受け入れられ救われる、というのである。

また、このような展望が、歴史的枠組みとしてより意識的に描かれているのがルカによる福音書と、その続編である使徒言行録である。これらいわゆる「ルカ文書」には、天地創造から終末までの人類史を、神の介入によって救済へと導かれる「救済史」として捉える歴史認識がその根底にある。この歴史認識に基づき、ルカは宣教の段階的発展という図式に沿って「歴史」を描こうとしている。

パウロやルカのような救済史的歴史認識は、その後、キリスト教神学において中心的な位置を占めるようになって現在に至るのであるが、じつはそういった救済史的な構想はマタイ福音書の中に自明のものとは言えないことを、本研究ではテキストの編集史的分析により明らかにした（本研究2章）。とくに、マタイ福音書がマルコ福音書をどのように改訂しているかという編集傾向の分析から、本研究では「律法遵守の強調」、「異邦人（宣教）への両義的姿勢」、そして「ファリサイ派批判」という三つの編集上のモチーフを見出したが、

このうちとくに前者の二つは、明らかに救済史的構想とは異なる方向性を示している。そこでマタイによる福音書記者の執筆動機については、マルコ福音書の補完やもう一つの基本資料である語録資料（Q）との結合および調停という水準を超え、また救済史的構想とは異なる方向性の執筆動機が求められなければならないことになる。

本研究では、マタイ福音書の執筆動機について、救済的に正当化された異邦人宣教の進展によって生じている律法遵守の軽視という風潮に対し、マタイは律法遵守を重視する立場から危機感をおぼえており、完全なる福音書を執筆することにより、宣教の方向修正に挑んでいるとする仮説を立て、それを検証した。

それにあたり、福音書記者マタイは、律法の「全て」を守ること、ただしマタイにとって唯一権威ある律法の教師であるイエス・キリストが残した解釈に則って遵守する、という内面の動機をともなった逐条的な律法遵守を重んじており、異邦人についても留保なくそれを適用することこそ正しい諸民族宣教のあり方であると主張していることを、「全て」（πᾶς）および「異邦人」／「民」（ἔθνος）というキーワードの用例分析および関連箇所での積義から示した（本研究3-5章）。

加えて、マタイの、内面的動機を伴った律法の逐条的遵守の重視という姿勢については、マタイが論敵を「不法」（ἀνομία）と呼んでいる箇所からも明らかにした（本研究6章）。マタイは律法遵守において瑕疵のある者たちを「不法」と呼ぶが、一方でファリサイ派をも同じ言葉で批判する。律法を厳格に遵守していることで知られたファリサイ派は、イエスが示した解釈に従わないことで、その律法遵守に内面的動機が伴わないことを露呈しているというのである。マタイ福音書全体の編集モチーフに「ファリサイ派批判」が見出されることはすでに言及した通りである。

それでは、律法遵守に瑕疵のある者たちとは、何者であろうか。実は、それは律法遵守を求めないことで異邦人への宣教に成功を収めつつあるパウロであり、思想的にパウロに近いとマタイには思われたマルコである、ということ、本研究では「福音」（εὐαγγέλιον）というキーワードが、

パウロとマルコでは用法が近似している一方でマタイはそれとは異なる傾向を示していることに着目して論じた(本研究7章)。その結果、マタイ福音書に反パウロ主義的要素を見出せる一方で、マルコ福音書に親パウロ主義的要素を見出せることから、両福音書の関係が親和的でも調和的でもなく、むしろ対立的であるという結論に至った。

それゆえ、福音書記者マタイの執筆動機とは、マルコ福音書の徹底的な換骨奪胎であり、その駆逐とすら考えられるのである。真の教師であるイエス・キリストの解釈に基いて、律法の完全なる遵守を唱道し実践する自らこそが、「真のイスラエル」であるという自己理解に福音書記者マタイは立っている。しかしそのようなマタイの一種の正統意識にもかかわらず、逆に福音書記者マタイの存在は周縁化されていく方向にあった。ユダヤ戦争の帰結としての70年のエルサレム陥落と神殿破壊のあと、ユダヤ民衆の復興運動は、一方ではファリサイ派の流れを汲む律法重視のラビ的ユダヤ教として形をなしつつあり、他方ではパウロ系統の諸教会のように律法の規定をゆるめて異

邦人へと門戸を開くことにより、成功を収めつつあった。とくに後者の脅威は、パウロ的キリスト教宣教、そしてその系譜に連なるマルコ福音書の普及によって影響力を広げつつあった。この状況に迫られて、福音書記者マタイは、マルコ福音書の改訂という事業に踏み出したのである。

以上を踏まえ、全体の結論として、マタイ福音書の執筆動機は、研究史上定説とされてきた救済史的な宣教の転換という構想に基づくものではなく、むしろそのような転換により律法遵守の留保ないし軽視へと傾く宣教のあり方を批判的に乗り越えることにあった、ということ、そして、その執筆動機が、イエス・キリストの解釈に基づく律法の完全なる遵守を唱道する福音書記者マタイの、「真のイスラエル」としての自己理解と、それとは裏腹に、紀元1世紀後半以降に起こった、ユダヤ教のアイデンティティを再構築する諸集団の諸プロセスの中で周縁化されていく福音書記者マタイの危機感に結びついていることを本研究では見出した。